

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2003 年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学	研究科	心理学	専攻
指導教員	所属・職名		氏名		
	文学部・教授		大野 久 印		
自然・人文の別	自然	人文	個人・共同の別	個人	共同名
研究課題	人格特性的自己効力感の形成過程に関する研究：漸成発達理論から捉え直す 試み				
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
	文学研究科・心理学専攻・ 後期 4 年		三好 昭子 印		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年		氏名		
研究期間	2003 年度				
研究経費	200 千円				

研究の概要 (200~300 字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

自己効力感とは、ある行動を自らが成功裏に実行できるという確信のことであり、ある行動に対する自己効力感が高ければ、その行動は効果的に遂行されるというものである。本研究で取り上げる人格特性的自己効力感 (generalized self-efficacy, 以下 GSE と記す) とは、自己効力感をある種の人格特性的な認知傾向とみなしたものであり、GSE が高いということは、何をするにも全般的に自己効力感を高く認知する傾向があるということである。本研究では生涯発達を視野に入れた大きな分析視点をもつエリクソンの漸成発達理論を枠組みとして用い、GSE の形成過程に関する研究を行った。

キーワード (研究内容をよく表しているものを 3 項目以内で記入。)

[人格特性的自己効力感] [形成過程] [漸成発達理論]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

＜質問紙調査＞ 人格特性的自己効力感 (GSE)、青年が認知している幼少期の養育環境、Erikson の漸成発達理論における主題の解決程度との関連を検討。

調査対象者：首都圏私立 4 年制大学生 358 名 (男性 159 名 / 女性 198 名 / 不明 1 名)、平均年齢 19.2 歳 (SD 2.15)

手続き：質問紙による一斉法。2003 年 6 月、授業中に質問紙を配布し教示を行い、その場で回答を求めた。

【結果】

▲ GSE と青年が認知している幼少期の養育環境との関連

青年が認知している幼少期の養育環境については、中学生くらいまでの家庭の様子を思い出してもらい、質問項目のような態度や行動、雰囲気、養育者にどの程度感じたかを回答してもらった。因子分析の結果、以下の 3 因子が抽出された。

「保護・共感」：項目例「私が落ち込んだときには、私を励まし支えた。」「私が傷ついたときは、私をなぐさめようとした。」「私の喜びや悲しみを共有してくれた。」

「家庭内不和」：項目例「家庭内の雰囲気は険悪だった。」「家族全体の関係がぎくしゃくしていた。」「家族はみんな仲が良かった。」(逆転項目)

「支配」：項目例「私が窮屈に感じるくらい干渉した。」「何から何まで私を拘束した。」「いちいち細かいことで私に注意した。」

→ GSE は、「保護・共感」、「家庭内不和」との関連は弱く、「支配」とは関連がなかった。つまり「保護・共感」的なあたたかい養育環境や「家庭内不和」調和といった家庭の雰囲気は、GSE の形成にまったく影響していないとはいえないが、直接的に強い影響は与えていないということが示唆された。

▲ GSE と Erikson の漸成発達理論における主題の解決程度との関連

「第 I 段階基本的信頼感対不信感」：項目例「私の未来は明るいと思う。」「人類って素晴らしいと思う。」

「第 II 段階自律性対恥・疑惑」：項目例「私は必要以上に、人に申し訳ないような気がする。」(逆転項目)、「自分で何かを決めた後、それが間違いだったような気がする。」(逆転項目)

「第 III 段階主導性対罪悪感」：項目例「自分の望みをかなえるためなら、あえて冒険してもよい。」「私は好奇心や探究心が旺盛だ。」

「第 IV 段階生産性対劣等感」：項目例「自分には能力があると思う。」「私のしたことを(人が見たら)人ならもっとうまくできたのではないかと、決まり悪い思いをする。」(逆転項目)

「第 V 段階アイデンティティ達成対拡散」：項目例「私って本当はどんな人間なのかわからない。」(逆転項目)、「私はいつも演技したり、見せかけの行動をしているように思う。」(逆転項目)

「第 VI 段階親密性対孤立」：項目例「私には喜びや悲しみを分かち合う相手がいる。」「本当の私のことを理解してくれた人なんて、これまで誰もいない。」(逆転項目)

「第 VII 段階生殖性対停滞」：項目例「私は、将来まで残るような価値あることをしている。」「私は、人生を無益に過ごしていると感じる。」(逆転項目)

→ GSE は、「第 IV 段階生産性対劣等感」ともっとも関連が強かった。Erikson (1950) によると子どもたちは、学童期に相当する第 IV 段階において組織的な教育を受けるようになり、道具や技術を用いて“物を生産することによって周囲の承認を獲得することを学”び、生産性の観念が発達していくという。しかしこの段階において道具の世界に必要な自分の知識や技術に絶望すると、“自分は結局凡庸に生れついているのだ、或は不適格な人間なのだと考えるようになる”という。これらのことから、GSE は第 IV 段階の主題の解決程度に強く影響される可能性が示唆された。

→ GSE はもっとも関連の強かった「第 IV 段階生産性対劣等感」を中心に、第 V～VII 段階との関連の強さに比べて第 I～III 段階との関連が強かった。つまり、GSE は発達の第 IV 段階までに形成され、人格特性として定着する可能性が示唆された。

研究成果の概要 つづき

→GSE は第 I 段階基本的信頼感との関連が強かったが、基本的信頼感の中でも特に、対自的な信頼感との関連が強かった。Erikson (1968) は第 I 段階基本的信頼感について次のように定義づけている。「『信頼』とは、自分は自分自身を信頼できるのだという根本的な感覚、ならびに、他人も本質的には信頼してもよいのだという感覚を、意味するもの」。つまり GSE は、基本的信頼感の中でも特に、対自的な信頼感の概念に近いことが示された。

<面接調査> 質問紙調査の結果をもとに、各発達段階における主題と、その青年期におけるあらわれ、活力という漸成発達理論の様々な切り口から GSE との関連を明らかにし、GSE の形成過程について検討。

協力者：首都圏私立 4 年制大学生 6 名 (GSE 高群 2 名、中群 1 名、低群 3 名)

手続き：2003 年 11～12 月。面接室において個別に守秘義務についての説明をした上で、約 90 分にわたる半構造化面接を実施。協力者に了解を得てその内容をテープレコーダーに記録し、後にそのテープを起こした。

調査内容：GSE の概念、全生活空間にわたる様子・気分、生育史、アイデンティティの様相、漸成発達理論の各概念など包括的な質問内容。

【結果】

◆GSE 高群は、どんな子どもだったかという質問に対して、「リーダーシップ」、「活発で、前に前に出たがる感じ」(052)、「はきはきしてた」、「仕切り屋」、「ずんずん進んでいくタイプ」、「班長タイプ」(024)というような表現で、のびのびと主導性を発揮していた様子を報告した。

→GSE 高群はまさに、基本的信頼感を基盤にして、自分の意志で、ある目的に向かって失敗を恐れずに主導性を発揮しながら、生産性の観念を発達させていることが示唆された。つまり発達の第 I～IV 段階の主題の解決程度が、GSE 形成の基盤になっていると考えられる。

◆能力があるという感覚や万能感については、過去も含めると GSE 高群低群にかかわらず、あったことがわかった。「スーパー小学生」「何でもできる方」(052)、「やればできるんだな」(024)、「調子に乗ってた」「自分が何かをやりたいと思ったら実現させることはできるんだって、漠然と思ってました」「一気に世界が広がった」(035)、「ちよくちよくは、何かちっちゃいことで(能力があると感じたことは)あった」(098)、「舞い上がって」「全能感に近い」「オールマイティな感じ」(101)。

→能力があるという感覚や万能感があってもかかわらず、なぜ GSE が高く形成されないのか。

(1)養育態度：「お前はダメなんだ、って言われることが多かった」(098) →能力があると感じることもあったが、養育者や教育者の評価によって「やっぱり結局、全体で見たら負けてんだ」(098)と思うようになったという。つまり、物を実際に生産しても、周囲の承認が獲得できない環境によって生産性の観念が発達せず、その結果 GSE が低く形成される可能性が示唆された。

(2)体力的強さ・弱さ、健康状態、体調の良し悪し：「体力もちよっとない(中略)あんまり自分を信用しすぎると失敗します。」(035) →体力的な強さ・弱さや健康状態によって自分自身を信頼できないということが、GSE を低める要因になる可能性が示唆された。

(3)気分の変調：「気分屋」(035)、「ころころ気分が変わるせいで、価値観まで変わる感じで(自分自身を信頼できない)」(101) →自分の意志で制御できない気分の変調は、自分自身を信頼できないことにつながり、GSE を低める要因になる可能性が示唆された。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版者、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

2005年3月の日本発達心理学会にて、発表予定。